

大賞

「僕」の名前

福岡教育大学附属福岡中学校 二年

峰岡 拓真

二〇一六年八月、僕は、僕のルーツを探る旅に出た。
二〇一六年の僕は、中学二年生。つまり、八月は夏休みだ。

「へえ。旅に出る余裕があるんだから、宿題はもう終わったのか。すごいね。」

終わっていない。

「夏休み明け、すぐテストなんでしょ？勉強したんだよね？」

……全くやっていない。

ルーツを探りたいと思ったきっかけは、父から聞いた、

衝撃的な一言だった。

「峰岡家は昔、お父さんのおじいちゃんの時に名字が変わったんだよ。」

ちなみに僕の名字、峰岡といいます。

父によると、もともとは「寿」という名字だったそう。……今思えば、そっちの方が良かったのでは？僕はなぜ名字が変わったのか、そして僕の先祖について、詳しく知りたくなった。

僕が向かった先は、鹿児島県の徳之島。僕は飛行機で向かった。徳之島で僕の祖父は生まれたそう。

徳之島について僕は、無事祖父のいとこに会うことができた。名前は「峰岡勝」さん。

まず案内されたのが、とある幼稚園の横にある石碑。

特攻隊で亡くなった人々を慰霊するために建立されたそう。その石碑の裏の名前の一つには、「峰岡忠男」と書かれていた。

石碑の前の、長い一直線の道路は、もともと太平洋戦争のときに特攻隊が飛び立つ滑走路だった。だから、そ

の道を「平和通り」というそうだ。僕の中に、言葉にし
 難い、重たい感情が湧きあがった。

祖父には、勝さんの他に、何やらもう二、三人いところ
 があるそうだ。今度は、そのうちの一人の家に行き、い
 ろいろ話を聞こうと思った。しかし、島の人同士で話が
 始まると、方言になって何を言っているのかわからない。
 聞いた瞬間、英語よりも難しいと確信した。結局、この
 ときは大した収穫はなかった。

その後、夕食に招待され、行ってみると、知らない人
 が増えている。「あなたはどこの誰ですか？」と直接的
 には聞きづらいうし、このまま誰なのかわからずにいるの
 も嫌だ。こんな状況の中、やっと祖父のいとこが僕に理
 解できることで峰岡家のルーツを語り始めるのだが、
 その話に出てくる人数の多いこと。

もう頭が混乱して、わけがわからない。

そこで僕は、思いついた。

「家系図をつくらう！」

こうして、やっとのことで話が整理できた。改めて家

系図を見てみると、曾祖父の代の四男のところまで目ごと
 まった。名前が、「峰岡忠男」なのだ。どこかで見たよ
 うな……そう。特攻隊の慰霊碑の裏に書いてあった名前
 の一つだ。

「僕の親戚には、特攻隊で亡くなった人もいたのか。」

今までは、特攻隊や戦争などは、僕からすぐく遠いよ
 うに感じていたが、このことを知って身近に感じるよう
 になり、同時に戦争は絶対にしてはいけない、というこ
 とを強く感じた。

さらに家系図を見ていくと、百二歳の親戚がいること
 がわかった。

この家系図には、いくつか空欄があった。今度は、そ
 の空欄を埋めるべく、病院に入院している百二歳の親戚
 に会いに行った。名前は、「峰岡スミ」さん。曾祖父の
 弟のお嫁さん。つい最近まで家の中では伝い歩きできて
 いたが、焼酎好きらしく、ある日酔っぱらってふらつき、
 足を骨折してしまったそうだ。

実際に会ってみると、僕の、「百二歳だから、覚えて

いないんじゃないか？僕のいう事が理解できないんじゃないか？」という予想は大きく外れていたことにすぐ気が付いた。見える、聞こえる、話せる、わかる。早速、家系図の空欄のところを尋ねてみると、どんな空欄が埋まっていく。名字を変えた理由を尋ねると、

「戦時中、名字が一字だと他国の人間と間違えられる恐れがあるから変えた。」

ということが分かった。さらに、なぜ「峰岡」という名前になったのか聞いてみたが、それはわからないようだ。そして、こう語った。

「私は、本当は『寿』という漢字を残して『寿山』が正しいと思っただけど何せ女だから、年上の男の人には逆らっちゃいけないと思っただまっただよ。」

名前の由来こそわからなかったが、当時の上下関係がよく理解できた。そして、戦争が人の名前までに影響を及ぼすことを知った。

この時点で、僕の高祖父の父、つまり五代前までわかった。そのほかに得た情報として、僕の曾祖父の兄弟だ

ちは、みんな学校の先生だったことがわかった。

こんなエピソードがある。

僕の高祖父は、農家で貧しかった。だから、勉強をたくてもできなかった。そんなある日、高祖父は、農作業中にハブに噛まれて動けなくなってしまう。経済的に厳しく、危険な農家。子どもたちにはこんな思いはさせたくない、と思っただ高祖父は、かなり無理をして六人の子どもを鹿児島まで学びに行かせた。

僕は、本は読めるし、学校にも簡単に行ける。とても恵まれていると実感した。

今回の旅で、峰岡家のルーツをとて深所まで探ることができた。それに加え、戦争の悲しさや、今の僕の身の回りの環境のありがたさを感じる旅にもなった。

僕の先祖は、偉大な人ばかりだ。

まず高祖父。とても大きな決断をし、自分の生活が苦しくなるのも構わず、「寿」家を発展させた。それに応えるかのように、曾祖父の代は全員先生になった。

曾祖父も、大きな決断をした。「寿」家を守るため、

あえて名字を「峰岡」にし、それに続いて祖父、父とも「峰岡」を守ってきた。

そして今度は、僕の番。先祖の努力をむだにしないよう、僕も努力しなければ。先祖の努力が一画ずつ積み重なって、「峰岡拓真」という字ができあがっているのだから。